

モンゴル外交私記－北東アジアの中の日本とモンゴル（連載第7回）

元在モンゴル日本国大使
元NEANET会長
花田 磨公

5. モンゴルとの外交関係樹立の顛末記（2）

墓参団の派遣

1965年夏国連セミナー出席の際、墓地で石を拾ってきました。戦没者の皆さまに墓前でそのご冥福を祈り、かならずご遺族をおつれするとお約束し、モンゴルとの外交関係樹立により一般墓参が容易くなることを祈願いたしました。帰国後、拾ってきた石を厚生省に寄託いたしましたところ、同省ではその石を細分化して、全国のご遺族にアトランダムに配布しました。ある朝NHKのニュース番組でそのことが報道されて石の破片が配られたことを知りました。

この放送が反響をよび、モンゴルへの墓参団派遣の話が持ち上がりました。藤山愛一郎元外務大臣が代表を務める「未帰還者同盟」の幹部の方々が訪ねてこられ、ツェデンバルモンゴル首相宛の書簡を持参されました。当時民間にモンゴル語タイプなどありませんので、兼任していた東京外国語大学の自分の研究室に行って、書簡を翻訳してタイプしました。書簡は郵便局に持参して投函しました。外交関係のない同国へ果たして書簡が届くのか、そして、ツェデンバル首相に読んでいただけるのか密かに心配しながら勤務しておりました。やがて、モスクワで在ソ連モンゴル大使館から日本の大使館へ書簡が届けられ、外交ルートで墓参団の訪問を受け入れる旨のツェデンバル首相の書簡が届きました。

1966年8月25-29日モンゴル滞在の日程で、第一回モンゴル墓参団の派遣が実現することになりました。団長には自民党の広報部長であった長谷川峻議員がなりました。野党から民社党の受田新吉議員が参加しました。ご遺族は抽選で8名選出され、厚生省から二名の方が同行することになりました。ご自身抑留者だった春日行雄氏が団長秘書の肩書きで参加することになりました。同行記者1名も参加することになりました。

1945年の抑留で13,847人（モンゴル側数字12,318人）の軍人軍属が抑留されました。この内死亡したのは1,684人（モンゴル側数字1,621人）です。ウランバートルのダンバダルジャー墓地に685柱（氏名が判明している方のみで、帰国者の話では氏名が不明の方もいて数字はもっと多い筈とのことです）、ウランバートル市東部のホジルボラン軍事基地内に252柱（厚生省数字250は計算ちがい）、スフバートル市の墓地に248柱埋葬されています。ユルーそのほかの13カ所の墓地に500柱余の方が埋葬されております。このときの墓参はウランバートル市の2カ所、スフバートル市1カ所のみでした。

モンゴル抑留はスターリンが70万人余を抑留したうちから、モンゴル側の希望で主として建設労働者として分け与えたものであることが今判明しています。抑留者の重労働は国際法で禁じられており、敗戦の当然の帰結でないことは明確です。日本人抑留者は厳冬期マイナス30度以下の環境で、川など冷たい場所で労働させられました。世界一厳しい環境

で労働した抑留者のご遺族にとって国家の第1回墓参団が組織された意義は大きいと思います。その後ダンバダルジャ墓地については遺骨収集が進み、いまは霊園となって残されています。

さて、この墓参団に外務省からも二名を同行させることとなり、1961年にモンゴル訪問の経験がある秋保東欧課首席事務官を同行させることとなりました。そして前年の両国外務省との意見交換を踏まえて、日本側も本格的に外交関係樹立交渉に乗り出すこととし、秋保首席事務官に加え、担当事務官兼モンゴル語通訳として花田中国課事務官を同行させることになりました。いよいよ外交関係樹立に向けて公式に本格交渉が開始されることになりました。昨年時点ではいつのことかと思いましたが、意外に早く墓参も外交関係樹立交渉の開始もきました。でも後者が決着するのはそれから6年後でした。

訪問ルートをどうするかが問題になりました。前年のモスクワ経由はご高齢の方も含むご遺族に申し訳ないと考え、また、前年のモンゴル訪問でイルクーツクで査証がとれるとの情報を得たので、何とか東回りで同地を経由できないか、ロシア課の天江事務官に相談したら、近く日航のハバロフス便の試験飛行があるという何とも文字通り奇蹟的な情報を得て、その便を特別便とする方向で検討いただき、便乗することとなりました。

ソ連から誘導員二名が来て同乗して案内をしていただき、8月22日プロペラ機DC6を日航パイロットが操縦して初めての航路に乗り出しました。墓参団はモンゴル班のみならず、エラブカ班もハバロフスクまで特別機に同乗しました。報道の方もモンゴル班には冨沢健二共同通信社会部記者が参加され、エラブカ班にはNHK報道局の永田昌弘カメラマンが同行しました。私もモンゴルという新しい世界を切り開くとの思いを新たにして機上の人となりました。ロシア沿海州は上空からでも見渡すかぎり洪水に見舞われていて、あらためてロシアの大きさに打たれるとともに、こんな身近なところに大洪水など気にもとめなかった未知の世界が広がっていることに驚き、これから私が相手にするのはこのような世界かと思ひも新たになりました。

ハバロフスクでは日本人墓地に墓参しました。夕刻自由時間に街の見物を1人でしていると、後ろから人がつけてくる気配がし、怖くなって最寄りのデパートへ入りました。やがて2人の東洋系の若い女性が追いついてきて、日本政府の人かと質問するのでそうだと応えると、そのうちの1人が実は自分は朝鮮系で父が日本統治下の樺太にいたが、終戦後帰ってこない。どうなったか調べてほしいとの要望でありました。結果はどこに連絡すればいいか聞くと、連絡は知らない。父が帰ってきて結果が分かるとの返答でした。帰国後各方面に照会しましたが、この問題の重大さと壁のすごさを思い知らされました。その後、アジア勤務を続けるなかで、何度も遭遇した二次大戦の悲劇の一つでした。退任後同志とともに北東アジアNEANET活動に参加したのも、その上にたってのことでした。

ハバロフスク空港ではまるでバスのようにつぎつぎJET機が各地に離陸していき、これは前年のオムスク空港で夜半にもかかわらず煌々と照らされた空港からつぎつぎ離陸していくジェット機に驚いて、西側の文明というけど、ここはもっと発達した別の惑星の基地のようだと感想をもちました。ただし、JET機は内張がなくリブがもろに出ていてまるで遊園地のボートのようでした。でもさすがガガーリン大佐を世界に先駆けて飛ばした国とびっくりするとともに、私も若かったので、この現実を見て日本でのソ連批判が本当に的を得ているのか、感情的にならず冷徹な目でもっと現実を見た上で正しい評価をす

る必要があるのではないかと思いました。

イルクーツクではツェヴェーン駐在代表が査証発給申請書をもって宿泊先のツェントラリナヤ・ホテルに訪ねて来られ、一端持ち帰り査証を作成して持ってきて、発給してくれました。モスクワ経由せず新ルートで行けました（その後このルートを使用したことはありませんでした）。イルクーツクでもインツーリストの手配で日本人墓地に墓参を果たしました。

さて、秋保首席事務官（後に駐モンゴル大使）と花田は墓参団滞在中、25日に現地で実施された合同追悼式、日本人墓地参拝に参加した後で、8月26、27の両日、一行が観光している間に、モンゴル外務省において、外交関係樹立交渉を正式に開始いたしました。モンゴル側からは、ツェレンツォードル第2局長、ワンチンドルジ事務官（英語通訳）、26日にはブンツァグ日本課長、27日にはドルジフー日本担当事務官が出席し、二度とも5人が出席しましたが、協議はツェレンツォードル局長と秋保首席事務官との間で行われました。用語は英語で行われましたが、確認はモンゴル語でなされ、日本側は花田があたり、時に秋保代表がロシア語で確認されました。また花田は担当として経緯の説明や、秋保首席に助言をしたり、記録を担当しました。協議は前年の意見交換を踏まえて、平和条約が必要か否か、そしてそれぞれの国のポジションの説明から開始されました。

協議では、両国間で外交関係樹立するにあたり、解決すべき問題を協議しました。日本側の問題にしたモンゴルの国際的地位、ノモンハン事件（モンゴル側ではハルハ戦争と呼称）、1945年のモンゴル側による対日宣戦布告、戦中や戦後の日本人抑留問題、モンゴル側が戦後米国にあった極東委員会に対日賠償請求をした問題など、両国間に存在するあらゆる問題について双方の認識を含め、交渉の火蓋が切られました。時に激しく応酬しましたが、雰囲気はきわめて友好的で、27日は午後2時から第一副首相が主催した墓参団を招いたレセプションに出席したのち、2時半から外務省どうし昼食をともにして、協議を続行し、午後も継続しました。翌28日も同様の日程であり、29日にはウランバートルを離れました。ツェレンツォードル局長と今後とも協議するのだとの強い印象をもって帰国しました。

団長の長谷川議員と受田新吉議員には交渉の経緯を報告し、団長の名において報告書は作成されました。長谷川団長は自民党内では右といわれた方なのに、その後、ずっとモンゴル応援団長でいて下さって、社会主義国モンゴルの代表の歓迎に私財も出して、酒の菰かむりなど提供するなどして下さいました。事務所にもよくお招きいただき、楽しくお話しさせていただきました。モンゴル問題について世間での認識が低いのを愁いて、社会党の川俣健二郎議員とともに外務省にこられました。長谷川議員は川俣先生のために花田がこれを取りあげるべきだと考える問題について質問を作れと命じられ、長谷川先生が答えるといわれ、議員の方々はいつも超党派でモンゴル応援団でありました。いまだと、なれ合いか言われて非難されますが、如何にしたら世間の耳目を驚かしてモンゴルに関心を持っていただくかと一体となって知恵をしぼっていました。鎌倉東慶寺の墓前にも何度かお参りさせていただきました。忘れがたい方でした。

チミドドルジ外務第一次官の来日

1967年4月に東京でアジア極東経済委員会（ECAFE）第23回総会が開催されました。

メンバーであるモンゴルはD. チミッドドルジ外務第一次官及びO. ホスバヤル在タイ大使らを派遣してきました。この機会に両国間の外交関係樹立交渉を継続することになり、相互主義の原則にのっとり、表面上は在タイ粕谷大使とホスバヤル大使と協議することにして、実質的には、小川平四郎アジア局長がチミッドドルジ第一次官と協議しました。この協議では賠償問題をモンゴル側が提議し、協議して平行線をたどりました。

日本はモンゴルを承認しておらず、宣戦布告されたけれどその事実を承知していなかったため、賠償問題が発生する理論的根拠がなかったのです。実際には両国兵士が戦っているため双方に損害もでています。結局は、モンゴル側のいう「モンゴル人の心を慰める問題」を日本側は「戦後処理の一環」として処理することを決断し、国会条約（国会で決議した条約）にして、外交関係樹立後の1977年に経済協力協定を締結しました。この条約により日本側は、モンゴルのゴビ・カシミア工場の建設に50億円を限度とする経済協力をして、同問題を最終的に解決しました。現在同工場は民営に移行し、ファッション性のあふれる製品を発表し続け、日本の通販でもニット製品を販売しています。

外交関係樹立への道は遠く、協議は合意にいたらず、6月からモスクワの中川大使とルブサンチュルテム大使との間で継続されることになりました。チミッドドルジ第一次官を空港に見送った花田に、「釣り竿を日本で買ったよ。良い竿だから、早くこないとウランバートル付近の魚を私が取り尽くしてしまうよ」と述べられました。ジョークや寓意をモンゴルの方は好みますが、同第一次官も例外ではないようで、私は早く外交関係樹立して赴任して来なさいとの意と解釈しました。

(了)